

近頃気になる日本語 一二一

木 村 光 子

昨年本誌に「近頃気になる日本語」を投稿して以来、テレビで話される日本語に注目してきた。昨年の原稿の最後に「本稿を言葉の定点観測にしたい」と記したので、この一年間でどのくらい日本語が変わったのか、又は変わらなかったのかについて私見を述べる。

昨年の分類に従って本稿も 1. アクセント、 2. イントネーション、 3. 文法、 4. 発音、 5. 敬語、 6. 語彙その他の順に記す。

1. アクセント

昨年、外来語のアクセントがその語本来のアクセントと異なり、平板化している点（ドラマ、スニーカー、サポートー等）を指摘した。今の時点（平成 15 年 10 月）で気がついたことは、このアクセントの平板化が、三音節、四音節の日本語（明治以降の外来語でないことは）に及んできた、ということである。先日のテレビで、「読者の方々」をドクシャノカタガタといっていた。また「感激した」という意味で「熱いものを感じた」という言葉がアツイモノヲカンジタといわれていた。「厚いもの」？と一瞬驚いたが、前後の関係で「熱いもの」と理解したが、今までして平板化の波に乗りたいものか、と、このナレーターの良識を疑った。この現象は、VTR につけられるナレーションでよくみられる。外来語が平板化している現象は依然として続いている、改善の気配もない。「従来」は「ジューライであるが、「ジューライ」と一本調子で話すアナウンサーがいた。ブランドとして有名なルイ・ヴィトンは普通「ルイ・ヴィ」トンだが「ルイ・ヴィトン」といっていた。「～のメロディー」というところを「～のメロディー」といっていた。チケット

をチケットといっていた。このチケットは、国内のみならず、ニューヨーク在住のスポーツキャスターといわれる30歳くらいの女性が、現地からの報告の中でも使っていて、驚いた。

昨年、日本語のrがl化していると述べたが、この傾向は続いている。Microsoft社のコマーシャルでは、すべてのrがlで発音されている。つまりMicrosoftも〔maiklossoft〕である。

外来語の平板化と本来の言い方のハザマで悩んでしまった例を聞いた。characterは、本来〔kærəktər〕で、日本語ではキャラクターとかキャラクターといわれていたが、今の流行に従うとキャラクターになるはずである。しかし、先日見たテレビでキャラクターといっていた。まるで、はやりではキャラクターなのだが、かといってそれに乗るにはちょっとという心の葛藤を感じられるようなキャラクターだった。

2. イントネーション

昨年と同様で、中間語尾上げは続いている、全体としてイントネーションの平板化は進行していると思われる。この中間語尾上げの使用者層は、中高老年層にまで広まっている。

3. 文法

昨年、ら抜きことばが広く用いられている点を指摘したが、この一年間で気がついたことは、ら抜きことばを使う高老年層が増えたことである。亀井静香氏：国民の支持を得れる、野球の大沢元監督：新庄はメジャーに出れない、キャシー中島氏：食べれない等の例が挙げられる。ただし、話者がら抜きことばで話していても、テレビのテロップには「ら」が入れてある場合も見られるようになった。

春期に短大の学生に「ら抜きことば」についての授業をした後、感想文を提出させたところ、「生まれたときから見れる、着れるを使っているがどこが悪い！」と書いた学生がいた。この学生の親が「見れる、着れる」を使っているからその子どもがそれを使用したのだろう。文法的に間違っていると説明しても、その使用者が主流になることによってことばが変化していくわけだから、本稿における私の「誤

用だ」という指摘はさしづめ「蠍の斧」を振り上げていることになるのだろう。

4. 発音

昨年、語尾につける「ね、ねー」の発音が〔nə :〕と聞こえると書いたが、昨年と同様、〔nə :〕は相変わらず使われ、使用者が増えている。

平成 15 年 3 月に始まったイラク戦争の報道をテレビで見ていて気がついたことは「現地時間○時、日本（ニッポン）時間△時」といういい方である。

平成 14 年にテレビ局に問い合わせたところ、日本はニホンでもニッポンでもどちらでもよいとのことだった。確かに切手も紙幣も Nippon と書いてあるからニッポンでもよいのだろうし、スポーツ関連で「ニッポンがんばれ」と叫ぶのもよいが、「日本書記」はニホンショキと読むところからすると、呼び方としてはニホンのほうが古いのではないか。

この戦争の報道で、ニッポン時間という言い方に違和感を覚えたので、それ以前はニホン時間という言い方だったのだと思う。このイラク戦争以来テレビ局ではあっという間にニッポンが主流となった。ニッポン人、ニッポン語、ニッポン社会、ニッポン政府、ニッポン映画、ニッポン大使館、ニッポン批判、ニッポン建築、ニッポン円、ニッポン側、ニッポン総領事館、ニッポン料理等々。あるアナウンサーはニッポン～という言い方に疲れたのかニッポン～と言った直後にニホン～といってしまった。

たぶん多くの人は、意識しないときにはニホンというのだと思う。平成 15 年の日本シリーズの時、あるアナウンサーが「ニッポン中が注目するニホンシリーズ」といい、その後もニホンシリーズといっていた。佐々敦行氏はある番組の中で、さかんにニホン国、ニホン人といっていたから、ふつうはニホンなのだろう。短大の学生に参考文献を読ませた時、彼らは皆ニホンと読んだ。しかし平成 16 年の 1 月現在、テレビのアナウンサーは、私の知る限り皆、ニッポンといっている。テレビ局間で「ニッポン」に統一したのだろうか。私の好きな「ニホン」といういい方は消滅する運命なのだろうか。

今年、目にいた（耳についた？）言葉に「玉音」がある。昨年もそうだったのだが、今年は、少なくとも私が聞いた限りにおいては、全部「ギョクオン」だ

った。私は小さい頃から「ギョクイン」と聞いてきたと思っているので、大きな違和感を覚えた。そこで、辞書を引いてみた。字源（昭和9年発行、以下、字源）によると「玉音：ギョクイン」は「天子のことば」とあり、「玉音：ギョクオン」は「玉を転がすような美しい音」とある。同じく昭和9年発行の広辞林（三省堂）（以下、広辞林）を引くと、玉音はギョクインと出でて①清く妙なる声、②天子のおことば、と説明してある。ちなみにギョクオンで引いたら出てなかった。角川新字源改訂版（1999年第33版、以下、角川新字源）では、玉音の読みとして、ギョクイン・ギョクオンの両方が出ている。新潮国語辞典—現代語・古語一第二版（1995年、以下新潮国語辞典）では、ギョクインの項で、①玉のような清らかな声、②天皇の声の尊称、ギョクオン、③他人の音信、書札の敬称、の説明があり、ギョクオンを引くと、ギョクインの②を見よ、と出ている。新明解国語辞典第五版（1999年第14刷、以下、新明解国語辞典）では、ギョクインは載っていない。ギョクオンで引くと、清らかな音声、天皇のお言葉という説明があり、例として、玉音放送と出ている。岩波国語辞典第五版（1995年第五刷、以下、岩波国語辞典）でもギョクインは載っておらず、ギョクオンの項に天皇の声、と書いてある。時通（初版1996年）では、ギョクオン：「玉のふれる音、また貴人の話を尊んでいう、特に天子のおことばをいう」と出ている。

以上の辞書の記載から、玉音は、戦前からギョクオンとも読んだが、天皇のお言葉の意味ではギョクインと読んでいた、といえる。私の記憶から推測すると、戦前から戦後しばらくの間は、玉音はギョクインと読まれていた。現在のテレビ界は、ギョクオンと発音しているが、天皇のお言葉の意味の玉音は、いつからギョクオンになったのだろうか。現在27歳の息子と24歳の娘は、口をそろえて、物心つく頃からギョクオンだったといっている。ということは、すでに昭和60年頃には、テレビ界でギョクオンが使われ始めていたということなのか。それとも、学校教育の中でギョクオンと教えられたのだろうか。

そもそもこのように、漢字の読み方に問題が出てくるのは、漢字の音読みが数種類あることが原因であろう。本題からはずれるが、短大や四大、または専門学校で教えていて気がついたことは、音読みや訓読みの区別の仕方がわからなかつたり、そもそも音読みや訓読みの違いを知らないが学生が多いということである。

いったい小学校での漢字教育はどうなっているのであろうか。この疑問の発端は、24歳の娘が小学校6年生のとき、「村会議員」を「ムラカイギン」と読んだことである。その時はたまたま娘が不勉強で読み間違ったのであろうと済ましていたが、その後、授業で学生に、「音読みってどういうこと？訓読みってどういうこと？音読みと訓読みってどういうふうに区別するの？」と質問すると、答えられない学生が非常に多いことがわかった。

小学校の低学年で「村」は「ムラ」と読みます、「町」は「マチ」と読みます、と教え、中学年で「村」は「ソン」とも読みます、「町」は「チョウ」とも読みます、と教えたら、高学年では、そもそも漢字は中国から輸入された文字なので、輸入されたときの漢字の原音を日本風に発音した読み方を「音読み」といい、その漢字の意味に対応するやまとことばをあてはめて読んだのが「訓読み」である、輸入された時期によって漢字の発音が異なっていたので、音読みにはいくつかの異なる読み方がある（たとえば「音」にはオンとインという読み方、「行」にはコウ、ギョウ、アンの三つの音読みがある）と説明すれば、子ども達も納得して複数の読み方を覚えられると思う。説明もなしに、「この漢字はこう読むのだから、ともかくも覚えなさい」とやられたら、子ども達も覚える気にはならないだろう。参考までに次ページに漢字の音訓の表をあげる。

さて、本題にもどって「音」の発音だが、角川新字源改訂版によると「音～」という熟語の23語のうち「イン」と読むのはたった一語である（音物：インモツ、贈り物、進物）。

「～音」という熟語で「イン」と読むのは、

- ・遺音（イイン）：ひびき、余韻、悲しい鳴き声をする、またその声、悲しい音色、後世に残った音楽、玉音
- ・徽音（キイン）：よいことば、立派な教え、美しい音楽、よい便り
- ・福音（フクイン）：喜ばしい、よい知らせ、キリストの教え
- ・余音（ヨイン）：余韻と同じ
- ・母音（ボイン）、子音（シイン）

であり、「音」のつくことばは、圧倒的に「オン」と読むことが多い。「イン」と読むことばには身近なことばは少ない。その結果、おそらく「玉音」は、戦前ま

漢字の音訓漢字の音訓

音訓	種類	解説	実例
音	吳音	推古朝(六世紀末)以前に朝鮮半島を経て伝わった中国六朝時代の揚子江下流(呉)地方の発音。	キョウモン ゲ トウミンコウ 経文、外道、燈明 ズキン ギヨウ ワ 頭巾、修行、平和
	漢音	奈良・平安朝(七世紀以降)遣唐使・留学生らにより伝えられた唐の都長安・洛陽地方の発音。	ケイブン ガイ メイ 経文、内外、明暗 トウ コウ カ 頭髪、旅行、和音
	唐(宋)音	鎌倉・室町時代(十二・三世紀ころ)の禅僧・商人らにより伝えられた宋・元以後の中国音。	キン ウイ ミン 看経、外郎、明朝 マジュウ アンギャオ 饅頭、行脚、和尚
	慣用音	わが国で漢字を誤読したものが定着し一般に通用するようになったもの。	モウ ツク 消耗(こう)、通行(とう・つ) ユ サン 輸出(しゆ)、撒布(さつ)
訓	正訓	漢字の意味に素直な訳をつけたもの。	ヤマ カワ アマツチ モノガタリ 山、川、天地、物語
	義訓	既成の熟語に対して個々の漢字の意味にこだわらず全体の意味を取り適当に訳語をあてたもの。	タナハク ウチワ ノリ 七夕、团扇、海苔 シニセ ノドカ 老舗、長閑、
	国訓	漢字本来の意味とはまったく関係のない日本語をあてはめた読み方。	カシワカツラ ムク クスノキ 柏、桂、椋、楠 アユ マグロ スシ サバ 鮎、鮪、鮓、鰐

たは戦後しばらくはギョクインと発音されていたのだろうが、ギョクインと読めない人がギョクオンと読むようになり、ついに今年はギョクオン一色になってしまったのだろうと推測する。それにしても 60 歳少し前くらいの NHK 出身の元アナウンサーが、ギョクオンというからにはテレビ界ではギョクオンに統一したのだろうか。私にとっては残念な変化である。ちなみに徽音といふことは知らない人が多いと思うが、私の出身大学の講堂の名前が徽音堂で、文化祭の名前は徽音祭である。

「音」の字の読み方がインとオンとの間でゆれているもうひとつの例として母音と子音がある。手元にある辞書を引いてみた結果を以下に記す。

広辞林（昭和 9 年）では母音はボインのみ、子音はシインのみである。

新明解国語辞典では、母音はボインとして出ていて説明があり、ボオンともいうと書いてあるが、ボオンで引くとボオンということばは出てない。子音はシインとして出ていて説明があり、シオンともいうと書いてあるが、シオンで引くとシオンということばは出てない。

岩波国語辞典では、子音はシオンで説明されていて、シインとも読むと書いてある。シインを引くとシオンを見よと出ている。そしてシオンの対立語として母音（ボイン）と書いてある。ボインを引くと説明があり、ボオンとも読むと出ている。対立語は子音（シオン）と出ている。

新潮国語辞典では、ボインで引くと母音、母韻の二つが出て、説明がある。またボオンと読むとある。ボオンで引くとボインを引けと出ている。シインは子音の字が書いてあり、説明がある。また、シオンとも読むとあり、シオンを引くとシインを見よと出ている。

以上のことから、母音、子音の読み方は、戦前はボイン、シインであったが、戦後はボオン、シオンと読む人が出てきたことが推測される。

発音に関して、ここ1～2年、目につくようになったことは、文中において母音で始まる語をいうとき、音の流れが瞬時途切れることである。動詞でも名詞でも形容詞でも見られる。昨年は、そんなことがあるな、程度だったが、今年はその頻度がいっそう高くなった。例、特別の・依頼、結局・扱われて、日が・浅いので。ある時、病院で読みあげられる名前も、姓の後の名前が母音で始まる人は、姓・名前と読みあげられていたのでオヤッと思った。姓と名を続けて読みあげる人もいたので、この傾向はまだ始まったばかりなのだろう。今後の動向に注目したい。

5. 敬語

昨年、「方（かた）や方々（かたがた）」という言い方が広まっている、と指摘したが、現在（平成15年10月）では、テレビではすっかり定着してしまった。昨年9月の段階では耳障りという程度だったが、この言い方は、イラク戦争以後定着したといえる。イラク戦争報道で、「～地区の方々」という記者がいて、「あれっ！」と思ったらすべての局で、すべての人に対して「方々」が使われるようになり、今では、普通名詞化したといえる。どうして「～の人たち」といわないのだろうか。「方（かた）」が使いたいのなら、精一杯譲歩して「方たち」ではないだろうか。一般庶民に対して「方々（かたがた）」はないだろうと思うのだが。つい最近、デヴィ夫人が「方たち」といっていたが、彼女の年代の感覚ではそれがまともな使い方なので使ったのだろうと思われる。

昨年「～させて頂く」ということばが誤って用いられていると指摘したが、今年も相も変わらず、5段活用動詞の未然形につけて使われている。昨年は若い人たちが一生懸命使うという印象が強かったが、こここのところは高老年層が無理して使っている涙ぐましい映像が映し出されている。このことから、この「～させて頂く」ということばがめったに用いられないことばであったということが示唆される。しかし今ではこの「～させて頂く」が5段活用でもちゃんと「未然形」に接続している点に感動すら覚える。

「～させて頂く」の流行は、物事を「丁寧」にいいたい気持ちの発露である、という点は理解できる。しかし、先日テレビで目にした次のような場面には、やはり唖然としてしまう。若い医者が患者に向かって、「(経過を見たいので、次の診察は)間をあけさせていただいて、3週間後でいかがですか。頸(くび)の写真の検査、予約させてもらいますね、10月8日で予約させてもらいますからね。」

つい先ごろ、久しぶりに田中真紀子氏がテレビに映って、短いコメントを述べたほんの1分もない間に、「お目にかかるせていただきました。～は差し控えさせて頂きます。～はこれにてとどめさせて頂きます」という具合に「～させて頂く」を三連発もしたのにはたまげた。もうちょっと普通の言い方はできないのー?しかし、彼女の話す言葉だけを取り上げれば、「～させて頂く」を差し引いて聞くと、昔風の物言いがあつて、また一生懸命丁寧に言おうという気持ちが感じられる点、好感が持てる。

昨年段階ですでに気づいていたが、近頃とみに「亡くなる」ということばが多用されている。昨年ではまだ「死亡した」ということばも使われていたが、今年は「死亡した」という言葉を聞くと「アレッ」と思うほどである。私自身は「亡くなる」は「死ぬ」の尊敬語だと思っていたので、何でもかんでも「亡くなる」というのはおかしいと思っていた。特に、身内が死んだときに「亡くなる」を使うことには、ずっと以前から違和感を抱いていたが、老若男女の別なく、現在は「亡くなる」が使われている。

「死ぬ」ではあまりにも直接的で何とかやわらかく婉曲に言いたい気持ちがあって、ていねい語のつもりで「亡くなる」を使うのだろうが、どんな対象に対し

ても無差別に使うことは、私には耐えられない。たとえば、本年7月に聞いた例に「(犬の)クロが悪性腫瘍のために亡くなりました」がある。犬にわざわざ「亡くなる」と言うことはないと思う。また小学生の子供が東京大空襲のビデオを見せられた後「(あんなふうに)自分が亡くなつたらいやだと思った」といっていたが、子どもが、自分が死ぬことを「自分が亡くなる」ということに違和感を覚えないか。多くの言葉には同じ意味を持つ複数の言葉があるが、「死ぬ」に相当するやまとことばは思いつかない(輸入された中国語である漢字の熟語には、死亡、死去、逝去、他界、鬼籍に入る、薨去、崩御等がある)。このことが「亡くなる」の多用につながってると考える。そういうえば、2~3年前に新聞の広告に某タレントとそのペットの話が出ていたが、そのペットの経験が最後に「~年~月、逝去」と出ていたので、新聞社に抗議した記憶がある。しかし、漱石が「我輩は猫である」のモデルの猫が死んだとき、友だちにあてた死亡通知に「逝去」と書いてあることから、猫には「逝去」を使ってもよいのだろうか。

岩波国語辞典によると「亡くなる」は「死ぬ」の婉曲表現とあり、新明解国語辞典でも「死ぬ」の婉曲表現で例文として「親が亡くなる」と書いてある。新潮国語辞典の例文にはすでに古今集で「親が亡くなる」との例文が出ている(とすると、昔から親が死んだときでも「亡くなる」が使われていたなら、私が考えていた「亡くなる」は尊敬語というのは間違いということになる)。そこで、誰かが「死ぬ」ではあまりにもむきつけすぎるので、丁寧にいうつもりでだれかれかまわず「亡くなる」といったところ、人々が早速それにとびついで使い始め、あっという間に(この一年で)広まったと考えられる。

6. 語彙その他

昨年「濃い目、濃い口」という言い方はおかしいのではないかと記したが、先日テレビで、茶道のお茶について「お濃い茶、お薄」といっているのを聞いて「あっ」と思った。茶道で「濃茶」というので「濃い目、濃い口」というようになつたのではないかと推測した。茶道でいつごろからなぜ濃い茶というようになったのかわからないが、誰か知っている人がいたら教えてほしい。

以下、気付いたことばを並べる。

○一つ目、一人目、一日目、一番目、一回目

最近よく耳にする言い方である。たとえば日曜日の午後の番組で、電車の週刊誌の中吊り広告を論評して、よい記事に☆印をつけるという企画を放映している。論評者が、今週の☆印は〇〇誌、というと、係の女性が☆印獲得一覧表の〇〇誌のところに☆印を貼るわけだが、そのとき〇〇誌の欄にひとつも☆印が貼ってないと、「〇〇誌は一つ目の受賞です」という。一つ目でなく「初めての」ではないか。その番組の司会者は60代半ばの元NHKのアナウンサーである。彼はなぜ注意しないのだろうか。「一つ目の受賞」という言い方をおかしいと感じないのだろうか。「一番目」も聞いておかしい。たとえば、何かの原因と考えられるものを列挙するとしたら、「まず（最初に）～が考えられる。次に（二番目に、二つ目に）～が、さらに（三番目に、三つ目に）」といったほうが自然ではないか。一日目ではなくて初日だろう。一人目ではなく最初の人だろう。近頃のことばの動きを一言でいうと「丁寧、婉曲」の方向に向かっているといえるが、なぜこの種のことばは「一つ目、一回目」などと「はっきり」「芸のない」言い方をするのだろうか。

○「よくがんばんなさいました」

このことばはまだ一回しか聴いたことがないが、あまりにも涙ぐましい言い方なので感動を覚えた。せいぜい「よくがんばられました」といったところだろうが、これを口にした人は、丁寧に言いたいのだけど、どういう風にいえばいいのかわからない、というためらいが表情に出ていて笑えた。

○夫妻、御夫妻

この言い方については、昨年取りあげたが、現在ある局（東京）では、ほとんど夫妻といっている。まるで局内で統一したかのようである。そして東京のテレビ局で「夫妻」に統一したのかと思わせられるほどだったが、つい最近、別の局の番組の司会者が、夫婦もしくは御夫婦といっているのを聞いて、喜びで涙にむせんでしまった程だ。週刊誌や新聞でもほとんど「夫妻」が並ぶ中、先日の産経新聞の一面の見出しに、金正日と縁続きの夫婦のことを「高夫婦」と書いてあったので、この新聞社はまだ旧来の言語感覚を保ち続けている人がいるのだなと思った。このニュースをテレビで放映したある局のアナウンサーは、高夫婦と一度

言って、その後あわてて夫妻といい直した。別の局のニュースショウの司会者は、この高夫婦の件に関してその番組の中ではずっと夫婦といっていたので、えらいっ！と思っていたら、後日のそのニュースショウでは、夫妻といっていたので、しらけた。

○「おやめなさい」

私が小学生か中学生のころ使っていた赤い小さな国語の辞書の後ろのほうに、命令形のいい方の地理的分布図が出ていた記憶がある。関東を中心とする地方での命令形は「お+動詞の連用形」で、関西地方は「動詞の連用形+なさい」であったと記憶している。私は関東出身であるから当然「おやめ、お書き、およこし、お下がり、お入り、お行き…」を使っているわけだが、最近そのようないい方をテレビでトンと聞かない。このいい方は、関東人にとっても、ましてや関西人にとっては、非常に厳しく響くのではないだろうか。その結果出てきたのが上記の「おやめなさい」といういい方である。これは、関東式の「おやめ」に関西式の「なさい」が結合した形であると考えられるが、「やめなさい」に丁寧語の「お」がついた形という風に受け取られて広まったと考えられる。直截なものいいで知られる60代の女流小説家が、新聞のコラムの中で「おやめなさい」と書いていたので驚いた。ある関西人の40代前半のお笑い系のタレントが番組の中で「お食べになってください」といった。文法的間違いはないにしても、品のあるいい方とはいいがたい。「お召し上がりください」が妥当なところではないか。

○マスコミ各位様

この言い方はあるタレントが離婚したとき、マスコミ各社に当てたFAXのなかで使われていた。「各位」を辞書で引くと「皆様方」という意味であるから、各位に様をつけたら「様々」になってしまい、おかしい。しかし、街中のはり紙で時々目にすることもあるので、各位の後に様はいらないと知らせないと、そのうち蔓延するだろう。

○「～とされる」

昨年、「～といわれている」というところを「～とされる」ということが多くなったと記した。

今年目に付いたのは、「沖縄戦が終わったとされる～」といいういい方である。「沖

縄戦」が終わった日は特定されているのに、なぜ、わざわざ「終わったとされる」というふうに「～される」といういい方をしなければならないのか。「沖縄戦が終わった～」ではどうしていけないのか、理解に苦しむいい方である。

次に「ひったくりは検挙が難しいとされていて、～」といいい方。「難しい」と誰が「する」のか。「ひったくりは検挙が難しい犯罪で～」で十分通じるであろう。なぜ「～とされていて」といわなければならないのか。

昨年同様、物事をあいまいに、婉曲に言いたい日本人の心性は一年で変わるわけはないということを思い知らされた。

○タニンゴト

のことばを辞書で引いた。新潮国語辞典には乗っていない。岩波国語辞典には、タニンゴトでは載っていないが、ヒトゴト（他人事）の項で「タニンゴトは『他人事（ヒトゴト）』の文字読みによる俗ないい方」と出ている。新明解国語辞典にはタニンゴトでは載っていない。ヒトゴトの項の説明として、これは本来「他人事」とかいてヒトゴトと読む、意味は、他人に関係したこと、よそ事と出ている。新潮国語辞典によると、ヒトゴトとは、自分には関係のない他人のこと、よそ様のこと、岩波国語辞典では、直接自分には関係のないこと、伝統的な表記は「他人事」、最近はこれをタニンゴトと文字読みする向きも多く、「人事」と別表記も見られる、と書いてある。

確かに「他人事」と書いてあつたら、タニン事と読みたくなるだろう。しかし誰かがタニンゴトといったら、ヒトゴトを知っている年代が「それはヒトゴトと読むのだよ」と注意できないものか。誰かがタニンゴトと口にしたら「それはどういう意味？ヒトゴトのこと？」といいなおしてやれないものか。憤懣やるかたない私としては、テレビで「タニンゴト」と聞くたびに「ヒトゴトだろうが！」と叫ぶばかりである。

○とある～。

最近よく耳にするようになった。「ある～」と同じ意味である。

「都内のとある高級会員制クラブ」、何もわざわざ「と」をいれて強調することもあるまいに、と思うが、このいい方もまもなく広がるのだろうか。

○御意見番

ニュースショーやワイドショーに一人又は複数の人が「御意見番」という名目で出ていることがある。御意見番といえば、大久保彦左衛門という具合に「見識のある人物が意見をいう」ということだと思うが、テレビで一見も二見も見識とはかけ離れた人たちが雁首を並べているのを見ると、「御意見番」なんていわないで、せいぜいコメンテーターにしておいてほしいと思う。ある番組の中に（この言い方もやがて「とある番組」になるのだろうか）過去一週間のスポーツ競技について論評するという企画がある。そこから出てくる御意見番は、皆ある程度の年齢で、かつ、スポーツの専門分野で名をあげた一角の人物が、彼らの専門分野の出来事について批判するので、彼らをご意見番というのは納得できる。

○「～でしょうかねえ、～ですかねえ、～かねえ、～ますかねえ」

これは疑問文である。若い人（高校生や20代くらいの女性）がよく使う。「～ですか？」というところを「ねえ」をつけてやわらかくいっているつもりなのだろうが、私には奇異に聞こえる。私なら「～かしらねえ」というのだが。今後はどうなるか注目したい。

○「野中広務は政界を引退を致すことを決意致しました」

野中広務氏が政界引退を表明したときのことばであるが、何もこうまでいうことはないだろうに、と思う。「野中広務は政界から引退することを決意しました」で十分意味が通じるではないか。「引退を致す」はないだろうと思う。昨年も指摘したことだが、「名詞+する」で動詞が作れるが、最近は英語の影響だろうか、「名詞を+する」という言い方がいっそう広まった気がする。そして「する」の謙譲語の「致す」を使うわけだ。引退致します、出席致しますというふうに、「名詞+致します」は使い慣れているが、現時点では、「名詞を+致します」まだ違和感を覚える。

○～じゃないですか。

この言い方は、昨年の段階ですでに読売新聞紙上で指摘されていたが、いっこうに衰える気配もない。老若男女にまんべんなく使われている印象を受ける。ちなみに、この老若男女も、いずれ、ロウジャクダンジョになるのだろうか。美男子はかなりの割合でビダンシである。どんなハンサムも「ビダンシ」では、百年の恋もすっ飛んでしまう。

○～円からお預かりします、～でよろしかったですか、～の方

スーパーやコンビニのレジでいわれる「～円からお預かりします」、ファミリーレストランで注文の確認の時にいわれる「～でよろしかったですか」、いたるところで使われる「～の方」。

「～円からお預かりします」は以前からおかしいと指摘されているが、相変わらず猛威をふるっている。「～でよろしかったですか」は昨年は聞いた記憶がないので今年からはやり始めたのだろう。「ご注文は～でよろしいですか」というべきである。それにしてもなぜ過去形でいうのだろうか。仮定形ではないのだから過去形でいうことはないだろう。しかし、この過去形を使う言い方は、ファミリーレストランだけでなく、若い人を中心徐々に広がっていると思われる。若い女性向きの洋品店で、若い店員さんがそう言うのを何回か聞いたし、旅行会社の若い女の子もそう言ったのを聞いたことがあるからだ。今度若い人がそういったら、そういう言い方は変だからやめなさいといってみようか。そんなことをしたら逆切れされそうだから、やめといた方が無難か、なるほど、こんな風に年寄りが軟弱だから、言葉の乱れが進んでしまうのだろうね。「～の方」も盛んに使われている。どうしてそんなにほかして言わなくてはならないのか。どうしてはっきり「～」といわないのか。そんなに自分の言うことに自信がもてないのか。なんだか情ない世の中になったものだ。

○ご苦労様

他人の努力をねぎらう言葉である。しかしである。私が非常勤で行っている専門学校の当時30代半ばの女性が、やはり非常勤できていた70代の男性に向かって「ご苦労様でした」といったのにはぶつたまげた。彼が帰った後、彼女に「目上や年上の人には言わないものよ」といったのだが、今は誰彼の区別なく使われている。まことに聞き苦しい。究極のご苦労様といったら、水戸黄門が助さん角さんに向かって「うむ、ご苦労じゃった」というイメージしか思い浮かばないのだが。

以上、いくつか気がついた点を述べた。

昨年は、変わったいい方がはやる原因を考察した。今年、気がついたことは、

物事をやわらかく、丁寧に、婉曲に言う方が多いという点である。その顯著な例が「頂かれました」だ。謙譲の「頂く」になぜ尊敬の「れる」がつくのか、しかもこの「頂かれました」は他人の動作に使われていた。

ことばは変化するものだから、キャーキャーいわずに放っておけばよいという意見もあるだろう。現に古語文法と現代語文法が存在していることから、今の日本語は昔の日本語から確実に変化したものだ。昔の人も、「今時の若者は正しい日本語を使わない」とさぞ悲憤慷慨したことであろう。ことばの変化が不可避であるにしても、その変化率を最小にとどめたいと私は希望する。そこでひとつ提案がある。在京のテレビ局が集まって、望ましいアクセント、イントネーション、漢字の読み方を従来どおりのものに統一してもらえないだろうか。フランスのコンセルバトワールとまではいわないが、従来どおりのアクセント、イントネーション、読み方を維持してもらえないだろうか。テレビに出演する人たちに、このようなアクセント、イントネーション、読み方に気をつけてください、と説明してもらえないだろうか。高齢の人が見れる、着れるというのを聞くと悲しくなる。高齢の人がハッソク（発足）、ハッシン（発疹）というのを聞くと彼らの教養を疑いたくなる。さすがにハッタン（発端）というのは聞いたことがないが、ひとつすると、これも時間の問題かもしれない。

次に、地方のテレビ局にお願いがある。在京のキー局からの放映は仕方がないが、地元のニュースは、方言で読み上げてもらえないだろうか。ずっと前のことだが、朝の7時台のニュース番組で、東北地方の中学校（小学校？）からの中継があった。番組に出ていた子供たちが皆標準語をしゃべっていたので、驚いた。彼らは方言をしゃべれないのだろうか。それともテレビに出るので標準語を話したのだろうか。私は方言のあるところで育ったことをとてもラッキーだと思っている。東京に出てきて標準語で話すようになってから思ったことは、標準語の会話はなんとなくよそよそしいということである。実家に帰って叔母たちの話す方言を聞くと、ほっとする。私にとって方言は本音であり、標準語は建前であるともいえる。たぶん私は、何かを考えるとき、方言で考えているのだと思う。標準語で話すときは、一種の鎧を身にまとった状態になるのだと思う。石川啄木の例を引くまでもなく、東京に出てきている多くの地方出身者は、私のように標

準語の会話によそよそしさを感じているのではないか。もしそうならば、是非とも地方のテレビ局は、方言の存在を積極的に主張してほしい。地元のニュースを方言で読み上げたり、地元向けの番組に方言を使ってほしい。もしかしたらもうそうしているテレビ局もあるかもしれない。私が東京にいるので気がつかないのかもしれない。方言のある地方の人は、方言で自己形成を行うのだと思う。大きな言い方をすれば、方言と標準語の両方を使うことによって、自己と他者、本音と建て前を認識するのだと思う。自己形成に不可欠の方言を大切にしてほしい。

三つの提案として、社会全体で物事を簡潔にいう運動を起こしてほしい。しかし、この提案はたぶん実現されないだろう。平安時代から連綿と続いてきて、すでに日本人の心のDNAに組み込まれたとも思える婉曲表現が（源氏物語の最初の一節を思い出してみればわかるだろう）、たかだか数年で変わらはずもないか。

ことばの変化が不可避であることは理解できる。しかし、ここ数年来の、日本語の崩壊とも思える変化を、手をこまねいて看過しろ、という意見には肯んじ難い。

たとえ、蠍蟬の斧であっても、今までのアクセントはこう、イントネーションはこう、読み方はこう、そのことばの使い方はおかしい、文法的に間違っているといいい続けることが必要であると考える。

追記

平成16年2月3日付の読売新聞の夕刊の連載記事「新日本語の現場 No.241」に、「鹿児島県の南日本放送では、1992年から8年間、方言による報道番組を放送していた」と載っていた。方言を大切に思う人たちの存在を知り、うれしく思った。